

# ゼロから創めて40年、 10億円肉用鶏への挑戦

—地域の飼料用米を活用したブランド「やまがた最上どり」の確立に向けて—

農業生産法人株式会社アイオイ(肉用鶏経営・山形県鮭川村)



(写真1)  
従業員集合写真(前列右から6番目 経営主の五十嵐忠一さん、右から5番目 妻のまゆみさん)

## 地域の概要

農業生産法人(株)アイオイは、山形県北東部の最上地域の鮭川村に位置している。鮭川村は県内でも豪雪地帯で、村の中心部を清流「鮭川」が流れている。農業は、キノコ栽培が盛んな産地で、畜産農家は4戸で、肉用牛、養豚、採卵鶏、肉用鶏、各1戸となっている。

## 経営・活動の推移

### 【ブロイラーにゼロから挑戦】

～「水稻専業+出稼ぎ」から「肉用鶏の周年農業」へ～

農業高校卒業後、昭和49年に水稻4haの専業農家の後継者として就農した。しかし、冬季期間は出稼ぎに行く生活であったため、なんとか周年農業が出来ないかと考え、収益性が高いブロイラーに興味を持ち挑戦することにした。しかし、地域には、ブロイラーの生産者はいなかったため、県外のブロイラー

農家で研修を行い、昭和54年に融資により飼育羽数24千羽規模の「観音寺ファーム」を設立し、ブロイラー経営を開始した。

### 【法人の設立】～10億円農業を目指して～

本県には、村山地域に「山形牛」、置賜地域には「米沢牛」、庄内地域に銘柄豚があるが、最上地域には代表する畜産物がないと思っていた。そこで肉用鶏を最上地域を代表する畜産物として育てていきたいと思った。

このため、更なる規模拡大と将来の加工への取組のため、資金調達や農地の取得、雇用の確保を進め、平成18年に法人化し、「農業生産法人株式会社アイオイ」を設立した。社名の「アイオイ(相生)」には、従業員や地域の人達と共に生きる、一緒に育つという意味が込められている。

(図1) 農業生産法人(株)アイオイのロゴマーク



(表1) 経営・活動の推移

年次	作目構成	飼養頭(羽)数	飼料作付面積	経営・活動の内容
昭和49年	稲作	水稲4.02ha		・農業高校卒業後18歳で就農(稲作専業、冬季出稼ぎ)
昭和52年	稲作	水稲4.02ha		・秋田県でブロイラー研修(3カ月間)
昭和54年	肉用鶏 稲作	ブロイラー24千羽 水稲4.02ha		・融資を活用し、観音寺ファーム(ウインドレス鶏舎4棟)建設
平成18年	肉用鶏 そば	ブロイラー24千羽 そば3.48ha		・農業生産法人株式会社アイオイを設立、認定農業者に認定
平成19年	肉用鶏 そば	ブロイラー60千羽 そば3.48ha		・融資で鶴ヶ平ファーム(ウインドレス鶏舎4棟)建設し、60千羽に規模拡大
平成24年	肉用鶏 そば	ブロイラー60千羽 そば3.48ha	飼料用米1戸 0.6ha 3t	・日本コップ会ブロイラーコンテスト優秀賞受賞(秋・冬) ・日本チャンキー協会「坪産肉量の部」で全国1位受賞
平成27年	肉用鶏 そば	ブロイラー132千羽 そば3.48ha	飼料用米9戸 25ha139t	・県単事業で三ノ平ファーム(ウインドレス鶏舎4棟)建設し、132千羽に規模拡大
平成28年	肉用鶏 そば	ブロイラー132千羽 そば3.48ha	飼料用米10戸 39ha235t	・国の畜産クラスター事業で飼料用米倉庫2棟を建設
平成29年	肉用鶏 そば	ブロイラー150千羽 そば3.48ha	飼料用米20戸 56ha336t	・畜産クラスター事業で三ノ平ファーム(ウインドレス鶏舎1棟)建設し、150千羽に規模拡大 ・日本チャンキー協会「坪産肉量の部」で全国1位受賞
平成30年	肉用鶏 そば	ブロイラー150千羽 そば3.48ha	飼料用米35戸 3団体83ha501t	・山形県ベストアグリ賞受賞(農林水産大臣賞) ・ブロイラーで全国初の農場HACCP認証
平成31年・ 令和元年	肉用鶏 そば	ブロイラー290千羽 そば3.48ha	飼料用米32戸 3団体84ha505t	・食品加工販売(委託製造)開始 ・畜産クラスター事業で新鶴ヶ平ファーム(ウインドレス鶏舎10棟)建設し、290千羽に規模拡大 ・第58回農林水産祭参加行事で日本農林漁業振興会長賞受賞
令和2年	肉用鶏 そば	ブロイラー290千羽 そば3.48ha	飼料用米34戸 3団体5農協 640ha1,729t	・畜産クラスター事業で食品加工施設整備 ・飼料用米とビーナッツのブロイラーに対する飼料給与技術で特許出願
令和3年	肉用鶏 そば	ブロイラー290千羽 そば3.48ha	飼料用米45戸 5団体6農協 722ha4,031t	・第4回飼料用米活用畜産物ブランド日本一コンテストで農林水産省政策統括 ・直営店「やきとり・からあげ米っこ最上」開店(鮭川村)、キッチンカー1台導入
令和4年	肉用鶏 そば	ブロイラー290千羽 そば3.48ha	飼料用米(計画) 50戸5団体 6農協 800ha4,500t	・「最上どり」商標登録 ・融資で鶴ヶ平ファームに飼料用米低温倉庫1棟整備 ・直営店「やきとり・からあげ米っこ最上」2号店開店(酒田市) ・JGAP認証

当面、10億円農業を目指して、平成19年以降、計画的に融資、県単事業及び国の畜産クラスター事業により4回の規模拡大を行い、新たに3つのファームを整備し、合計4ファーム・23棟、常時飼育290千羽、年間出荷1,700千羽となり、県内で最大、東北でトップクラスのブロイラー規模となった。

### 経営管理・生産技術の特徴

#### 【生産技術の高い経営】

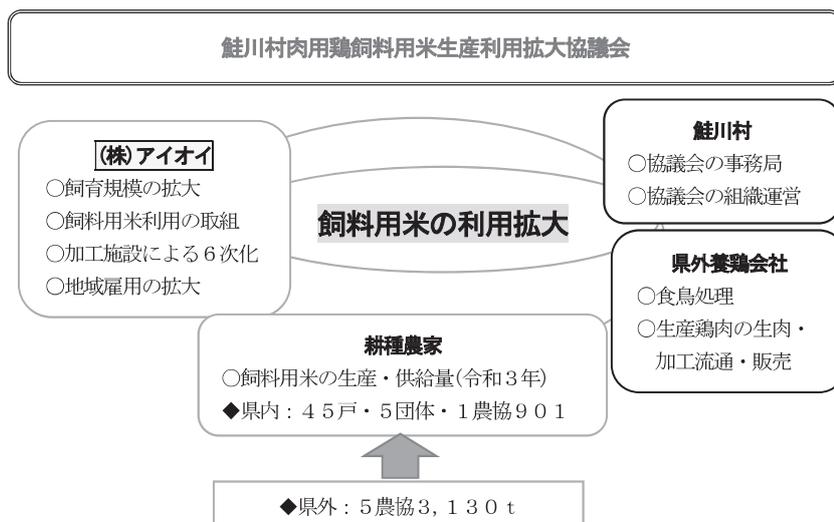
～全国トップクラスの技術レベルを実現～

生産技術は、出荷日齢49.2日、出荷回転率6回、平均出荷体重3kg、飼料要求率1.77、育成率98.2%となっている。日本チャンキー協会で、毎年実施しているコンテストにおいて、平成24年、29年に「坪産肉量の部」で2度の全国1位を受賞しており、生産技術では全国トップクラスである。

(表2) 経営実績

経営の概要	労働力員数 (畜産・2000hr換算)	家族・構成員	2.4人
		雇用・従業員	30.5人
	肉用鶏平均飼養羽数		289,397羽
	肉用鶏年間飼付羽数		1,715,650羽
	肉用鶏年間出荷羽数		1,685,195羽
収益性	所得率		9.0%
	肉用鶏100羽当たり生産費用		42,140円
生産性	出荷回転率		6.0回
	平均飼育日数		49.2日
	平均休室日数		10.8日
	平均出荷日齢		49.2日
	肉用鶏出荷100羽当たり出荷時体重		299.8kg
	肉用鶏出荷100羽当たり年間鶏肉生産量		149.9kg
	育成率		98.2%
	飼料要求率		1.77
	生体1kg当たり販売価格		179.7円
	鶏舎1m <sup>2</sup> 当たり年間出荷羽数		110.4羽
肉用鶏出荷100羽当たり投下労働時間		1.60時間	

(図2) 鮭川村肉用鶏飼料用米生産利用拡大協議会の構成



**【飼料用米の利用の取組み】**

～地域資源を活用した安全安心な鶏肉生産～

地域資源である飼料用米を活用し、安全・安心な地域ブランドの鶏肉を生産したいという思いから取組みを開始した。飼料用米の安定確保を図るため、平成28年に耕種農家と関係機関・団体からなる「鮭川村肉用鶏飼料用米生産利用拡大協議会」を設立した。現在、飼料用米の生産は、地元の鮭川村を含め12市町村・45戸・5団体・1農協に加え、県外の5農協から協力してもらっており、令和3年には4,031 t（玄米換算）を確保している。

(表3) 飼料用米の生産面積及び生産量の推移

年次	H28 (実績)	H29 (実績)	H30 (実績)	H31・ R元 (実績)	R2 (実績)	R3 (実績)	R4 (計画)
農家・ 団体・ 農協数	10戸	20戸	36戸・ 3団体	32戸・ 3団体	34戸・ 3団体・ 5農協	45戸・ 5団体・ 6農協	50戸・ 5団体・ 6農協
面積※	39ha	56ha	83ha	84ha	307ha	722ha	800ha
生産量	235 t	336 t	499 t	505 t	1,729 t	4,031 t	4,500 t

※：推定面積

**【自社生産のプロイラーのブランド化】**

～「やまがた最上どり」の商標登録～

地名の「最上（もがみ）」と掛け合わせて「最上（さいじょう）=NO1」のプロイラー生産を目指したいとの思いを込めて、「やまがた最

上（もがみ）どり」というブランド名とし、令和4年1月に商標登録した。「やまがた最上どり」の認証基準は、『飼料用米を3週齢以降に50%以上給与したもの』とし、現在、全てを「やまがた最上どり」として出荷している。

**【安全安心な鶏肉の高品質化】**

～農場HACCP・JGAP手法による高品質生産の取組～

平成30年に農場HACCP認証を全国で初めてプロイラーで取得し、また、令和4年にJGAP認証を取得し、その手法に即した衛生管理の徹底と防疫体制の強化及び疾病予防に万全の対策を行い、安全・安心に拘った生産・販売に努めている。また、JGAPの取組やチェックリストの活用を通じてアニマルウェルフェアを推進している。

また、給与飼料を見直し、ハーブ添加の配合飼料に飼料用米及びピーナッツ（食味向上効果：山形大学農学部共同研究令和2年特許

(図3) やまがた最上どりの登録商標





(写真2) 加工施設 (右) 及び直営店1号店 (左)



(写真3) キッチンカーでの販売状況

申請中) を混合し、臭みがなく、歯ごたえがあり、遊離アミノ酸が多く味にコクとうま味がある高品質の鶏肉に仕上げている。

### 【6次産業化の取組み】

#### ～やまがた最上どりの付加価値化販売～

平成30年から「やまがた最上どり」を原料とした加工品の委託製造を行い、6次産業への取組みを始めた。令和2年に食品加工施設を整備し、自社製の焼き鳥用の串刺し肉の製造や精肉加工を行っている。また、消費者に直接販売するため、令和2年に直営店1号店をオープンし、令和3年にキッチンカーを導入した。令和4年には観光名所の酒田港に直営店2号店をオープンし、さらに、県内各地の道の駅や産直施設等において販売している。

食品加工施設では、需要に基づいた製造を開始したが、新型コロナウイルス感染症の影響で計画どおりの販売ができない状況になった。このため、営業部門を強化し、農場 HACCP・JGAP認証で飼料用米50%給与の「やまがた最上どり」という特長を活かし、県内外の精肉店、スーパーやホテル及び飲食店での販売、自社を含め6カ所のネット販売を開設し、販売のチャンネルの拡大を図り、直接販売の割合を高めている。

#### 【配合飼料価格高騰への対応】

#### ～地域資源利用による飼料費の更なる削減～

飼料用米の確保量は、4,000 t の目途がついたことから、令和4年から混合割合を1週



(写真4) やまがた最上どりの加工品 (一部)

齢10%、2週齢20%、3週齢以降は50%にして給与を実施している。また、県内の菓子メーカーの工場で廃棄されていたピーナッツに注目し、3週齢以降はピーナッツの混合割合を2%とし飼料費の削減を行っている。

令和5年からは、3週齢以降の混合割合を飼料用米は60%、ピーナッツは2.5%に高める予定にしており、配合飼料のみに比べ、飼料費の削減率は41.7%、飼料自給率は48.8%、ME自給率は49.3%に大幅に高まると試算され、更なる配合飼料価格の高騰対策も計画している。

(表4) 飼料用米等の利用による飼料及びME自給率、飼料コスト削減の推移

区 分		H30	R元	R2	R3	R4 (実施中)	R5 (計画)
配合飼料のみ	飼料価格	100	100	100	100	100	100
	ME量	100	100	100	100	100	100
飼料用米 + ピーナッツ	飼料価格	93.3	96.9	93.9	80.8	64.1	58.3
	飼料自給率	10.9	5.1	12.7	29.0	41.2	48.8
	ME自給率	11.2	5.2	13.0	29.6	41.6	49.3
混合割合	飼料用米	1週齢				10.0	10.0
		2週齢			4.0	20.0	20.0
		3週齢以降	20.7	11.8	23.2	40.0	50.0
	ピーナッツ	3週齢以降				2.0	2.5

注：配合飼料価格は、令和4年10月時点の価格で試算

## 【飼育管理の省力化】

### ～肉用鶏出荷100羽当たり労働時間1.6時間を実現～

全自動ウインドレス鶏舎で、鶏舎内外に無人カメラを設置し、その画像を事務所でモニターやスマホで鶏舎内の鶏の状況をリアルタイムに確認することができる。これにより飼育環境の調節や鶏の異常の早期発見などで省力管理を実現している。

また、飼料製造、飼料給餌、たい肥製造・袋詰め及び出荷後の洗浄・消毒等の機械化を推進し、労働の省力化と負担軽減を図っている。農場HACCP及びJGAPの取組みにより、業務が見える化され、職員の意識が変化し、作業効率が向上した。肉用鶏出荷100羽当たりの労働時間は、1.60時間と大幅な短縮になった。



(写真5) 鶏舎内の監視モニター

(表5) 肉用鶏飼育管理等の労働時間の推移

項目	H30	H31・R元	R2
従業員数(2000時間換算)(人)	9.0	14.2	13.5
鶏舎数(面積)(棟/m <sup>2</sup> )	13(8,250)	23(15,899)	23(15,899)
肉用鶏100羽当たり労働時間(h)	2.06	1.70	1.60
従業員1人当たり	管理羽数(羽)	16568.3	20342.9
	管理鶏舎数(棟)	1.44	1.62
農場HACCP等の認証取得状況	農場HACCP認証		JGAP指導員資格

## 【環境保全の取組み】

### ～畜産のイメージアップの取組～

「畜産をやっているように見えない畜産業を」との想いから臭いがほとんどなく、施設周辺を清掃し、大型鉢花飾りなどを行い、畜

産のイメージアップの取組みを行っている。

鶏糞を燃料にした鶏糞温水ボイラーを床暖房に活用し、鶏舎内の生糞を適度に乾燥することにより、鶏舎内の環境改善及び臭気対策にもなっている。また、燃料にした鶏糞の焼却灰は、リン酸・加里肥料として飼料用米を生産している耕種農家に利用してもらうほか、県内の水稻、果樹及び野菜農家等の特殊肥料として販売している。

## 【持続可能な経営の取組み】

### ～SDGsの推進～

持続可能な経営を目指し、SDGsの開発目標9項目の取組を行っており、取組みを内外に明確に示すため、「SDGs取組み宣言書」を社内に掲示している。

## 地域貢献

### 【耕畜連携による地域農業への貢献】

#### ～循環型農業の実践～

地域の耕種農家と連携し、県内の45戸・5団体1農協から901tの飼料用米の供給を受け水田農業の活性化に貢献するとともに、鶏糞の焼却灰を特殊肥料として飼料用米生産農家に供給して耕畜連携及び循環型農業を実践している。

(図4) 耕畜連携図



## 【地域経済への貢献】

### ～地域の関係業者と連携し、共に発展～

飼料用米生産をしている県内耕種農家・団体・農協、その他食品製造会社、加工品材料の供給業者、加工製造委託業者などと連携し、共にWIN - WINとなる関係を構築し、水田農業や地域経済の発展に貢献している。

### 【地域の雇用への貢献】～地域雇用80人を計画～

当社の従業員の雇用割合は、最上地域94%のうち地元の鮭川村が42%で、また、出荷作業の臨時雇用人数延べ690人のほとんどが最上地域の住民で、令和4年に雇用80人を目指し地域の雇用創出に貢献している。

## 女性の活躍・働きやすい 職場環境づくりの取組

### 【女性の活躍】～会社の成長を支える～

会社の従業員は7割が女性で、ほとんどが事務及び加工部門に所属しており、事務担当者は、事業計画、補助事業、農場HACCP・JGAP、ネット販売を含めた営業などを担当し会社の成長を支えている。加工担当者は、女性ならではのアイデアを活かして商品化や、直営店等の対面販売での料理法の紹介などが喜ばれ、売上げの増加にもつながっている。

### 【働きやすい職場づくりの取組み】

#### ～モチベーションを高める職場環境づくり～

全自動ウインドレス鶏舎でモニター管理や管理作業を機械化により労働の省力化及び軽労化を推進し働きやすい職場環境に努めている。また、女性従業員が多い事務及び加工部門では、標準勤務時間8時間を7.5時間とし、パートタイムの人は希望に応じて2.5～7.5時間から選択できるようにし、働きやすい環境づくりをしている。

## 将来の方向性

### 【次世代への継承及び今後の経営計画】

#### ～更に規模拡大・食鳥処理施設を整備～

後継者の長男は、現在、会社経営の勉強のため、中小企業を支援する団体に勤務し、外部から勉強しているところである。現在計画している規模拡大と食鳥処理場の整備する段階で、経営に参加する予定にしている。

規模拡大に伴い、必要となる雇用や飼料用米の確保、また、更に自給率の向上を図るため、新たに未利用大豆及び子実用トウモロコシの利用を予定している。今後とも、地域に支えられて誕生した「やまがた最上どり」のつながりを通じて、地域貢献や地域に愛される持続可能な経営を進めながら最上地域を代表する肉用鶏産地を目指し、頑張っていきたいと考えている。